

岩波 現代中国事典

岩波書店/1999年5月/1457頁/6600円



今泉潤太郎

本書が中華人民共和国五〇周年にあたる本年に出版されたのはまことに時宜にかなうものである。

本書に先立って一九八五年に『最新中国情報事典』(小学館)、一九九五年に『キーワードで読む現代中国』(岩波書店)、一九九七年に『中国百科改訂版』(大修館書店)、一九九八年に『中国情報用語事典』(蒼蒼社)など、中国を対象とした小型事典が次々と現われ、それぞれの特色を売り物として広く読者に受け入れられた。本書はこれらにみられる新しい編集傾向にも注意を払った本格的な現代中国事典として出版されたものである。

ところで今から四〇年前にも本書と同名の辞書が出版されている。それは中国研究所編『現代中国事典』(岩崎書店発行、以下Aという)である。実はこの一〇年前にも中国研究所編『現代中国辞典』(以下Bという)が出版されている。新中国成立の翌年のことである。AはBの全面改訂版である。

このようなことを知っているのはかなりの年配者であろうか。ちなみにAの執

筆者六八名中、本書でも執筆されているのは僅か一名である。このことに今さらのように感慨をおぼえるのは評者ばかりではあるまい。

さて、「現代中国の全体像を現段階で集約すること」を目的に編集された「激動の半世紀を読み解く、初の総合事典」である本書を評する資格を評者は有するものではない。ただ長年にわたり愛知大学『中日大辞典』の編纂(執筆と編集)に携わってきた点が『中国21』編集者の目にとまり、読者と編者の両方の側から見た書評を期待されたものと勝手に解釈して以下寸評を試みたい。

重厚長大から軽薄短小へ機能重視の流れは辞書界も例外ではない。本書とA、Bとの形状の差は歴然たるものがある。本書は重さ1kg、束は四七mm、このサイズはほぼ片手で扱える限度であり、これを超える書籍を扱うのにぐっと不自由になる。ちなみに一・四五kg、七〇mmの『中日大辞典』はもはや片手だけで扱うのはいささか困難となる。

本書の記述は小項目を見出しに揭げ、

かな表記、中国語表記（簡体字、繁体字を含む）、拼音（場合によりウェード・ジャイルズ式表記をつける）、解説の順で、最後に英語表記をつけている。

内容からいえば逆でA、Bに比べ本書は本文中に四三〇〇項目あり、項目数は約二倍である。頁数は本書が最も多い。事典と称する書籍がいたずらに豪華さをひけらかし応接間の書棚に置かれるのは書籍にとつても本意ではあるまい。使われてこそその辞書である。

さて、頁数の増加より項目数の増加が上回り、結果的に一項目当りの解説は少なくなる。項目によってはA、Bに比し解説では三分の一程度になり、その分だけ簡潔さを求められる。最低必要なものを心掛ける必要十分なものへの配慮はできない。その兼ね合いがむづかしい。本書では項目別の執筆者はA、Bの約三倍の二〇〇人を超えており、編集者のこの点の苦勞も大変なものであろう。むろん、編集者の意図が執筆者に理解され、その結果が読者の満足につながる辞書づくりを目指すのではあるが、これは至難

というべきである。

それぞれが互いに関連していることを承知のうえで以下いくつかに項目を分けて述べることにする。

一 凡例について

辞書における凡例は読者にとつても編集者にとつても重要なものであるが、読者にとつては機器のマニュアル以下の存在で、きちんと読まれていないようだ。余計なことだが中学校あたりで英和辞典や国語辞典を使わせるとき、最初に凡例のよみかたを指導するとよいと思うが実情はどうであろうか。機器の操作とちがい、辞書をひいて調べる作業自体は単純であるから、凡例を見なくとも何ら痛痒を感じないのである。だからといって凡例が簡単すぎるのも困る。

キーワードと項目の集中の二つを例にとり凡例について述べてみる。本書は厳選した六〇語をキーワードとし大見出し囲み項目の形式で一般の項目と違う扱いをしている。これだけで現代中国が概観できる（本書の発売用パンフ

中の表現）のであるから、この六〇語が何であるかを知らせることは重要である。凡例は簡潔明快でなくてはならない。本書は三頁ですませている。仮にこの六〇語を凡例にのせるとすれば一頁分増すことになる。凡例で定めなら他の方法で知らせることも可能であり、そうする価値もあろう。例えば五十首別で始まる各項の前に置かれる「あ」「い」「う」など冒頭部の見出しに記載するなどである。

キーワード六〇語の見出しは「映画」、「大躍進」（以下「」は本書での項目を示す）のように明確に対象を表現でき、かつ前後に関連する項目が無い場合は効率的である。しかし「台湾」は範囲が広範囲であるため、「台湾の軍事」、「台湾の経済」、「台湾の工業化」、「台湾の社会」、「台湾の政治」、「台湾の外交関係」、「台湾の文学」、「台湾のマスコミ」、「台湾の歴史」など計一〇語のキーワードをあげたうえ、更に「台湾の〇〇」という六一の項目をあげている。これではかえってキーワードを設けた意味が薄れるきらいがある。

項目の集中についていえば、凡例Ⅱの解説文についての7で、立項された語の解説を他の項目にすべて譲ることについての注意がある。「A株」を例にとれば和文索引により該当頁に至ると確かに「A株」をみつけるものの肝心の説明は「↓B株」へと譲られている。このケースは凡例で示しているのでルール違反ではないが、読者側からいえば和文索引の段階で直接「B株」の該当頁を示してもらいたいと思うだろう。凡例で示せばこの方法もとれそうだ。

二 字体と字音について

日中両国で漢字を共用することからさまざまな厄介な問題が生ずる。主に中国と台湾関係で使い分けられる簡体字や繁体字また日本語表記上の異体字や慣用音などである。一例を挙げると、本書では磚茶（「広辞苑」では「たんちや」。しかし磚は「せん」としていて不統一、ちなみに「中日大辞典」では磚茶「せんちや」、磚「せん」と統一）は「煉瓦茶」として立項されており、和文索引でも「煉

瓦茶」だけである。中国語索引に「砖茶」*zhuancha*を入れるのはもちろんであるが、和文索引に磚茶「せんちや」または「たんちや」としてだしてはいないのはどんなものか。

人名の読みかたも右に関連する問題である。例えば本書が馮^う、沈^{しん}、齊^{せい}とし、^{ひよ、ち、い}を採用しないのは一見識である。ならば「胡適」の項で^{きこ}としながら慣用音の^{こせ}を併記するのはいかなものか。姓と名とで扱いを別にしたのであるうか疑問が残る。

読みかたではないが、例えば「戴季陶」は天仇の号でよく知られ、名の傳賢で立項するより季陶のほうがよい。しかし天仇としても悪くはない。孫中山は「孫文」として名のほうをとっている。これも本名に統一してしまえばさっぱりする。また「テン、テレサ」とテレサ・テンや「リー、ブルース」とブルース・リーのどちらが立項として妥当か。細かな点だが解説中ではブルース「リー」とわざわざブルダーシを用い、項目と区別する必要は何だろうか。また、少なくとも和文索

引にブルース・リーをのせておく必要があると思われる。

日中同形語も同様である。本書中のa「餃子」、b「相声」、c「公司」の三語を例にとつてみたい。多分この順で日本語としてなじんでいるであろう。即ちaはギョーザという日本語、bは中国語^{xiangsheng}であつて、「そうせい」という日本語ではない。cは「こうし」またはコンス（クンス）のどちらか一方に固定するに至つていない中間的な存在の日本語とみる（「広辞苑」での扱いを参考にした）のが評者の見解である。

さて、a「餃子」^{ギョー}は本文、和文索引ともに同じである。cの「公司」^{しゅう}は本文では↓「公司」^{コン}へと導かれており、和文索引は「こうし」とコンスの二か所に出る。ところでbは本文では「相声」^{せう}として立項される。他に「漫才」^{まんざい}が↓「相声」へと導かれている。和文索引では漫才があり、中文索引は相声^{xiangsheng}である。和文索引に相声^{せう}を認める立場からすればいれないほうが妥当

となる。

類似の問題として、d「北京映画学院」、
e「中央テレビ局」、f「北京語言学院」、
g「北京工人体育館」を例にとる。d・
eは原名の一部を訳して立項したのに対し、
f・gは原名のまま立項している。
d・eの「电影」、「电视」が日本語でない程度とf・gの「语言」、「工人」が日本語でない程度に差があり、その差がd・
eとf・gの差となつたとするには無理があるようだ。つまりは無理があつても、
やむを得ないということになるのである
うか。

以上の問題は厄介であるが工夫する上で
努力を惜しんでほならない。

ついでに同形異語の取り扱いを「大同」
を例に取り見てみよう。h「大同」、i
「大同」（「股份有限公司」の略）、j「大同
思想」の三項目はすべて「大同」として
括つてもよさそうであるが本書は別項
目として取り扱っている。一括すれば一
項目ですむかわりに内部で分けなければ
ならないことになるので、妥当な扱いで
あらう。

三 中国語表記について

当該項目に対応する中国語は通常一語
であるが時に複数あがる場合もある。

例えば「開墾」の項に対して（「开垦」
と「开荒」の二語をあげている。「开荒」
は「开垦荒地」の意であろうか。他方、
「労働改造」、「労働矯正」の項に対しては
「労働改造」、「労働教養」をあてている。
「開墾」の例にならつて「劳改」と「劳
教」を併記して当然ではないか。いっそ
のこと一項目に対応するのは一語と決め
てしまうのもよい。現に「開墾」の英語
表記は reclamation があたえられているだ
けだから中国語表記も「开垦」だけでよ
いわけである。

もうひとつ「中国語」を例にとれば、
「汉语、中国話、中文」の三語をあててい
る。さらに解説の中では、「普通話
ブート、官話、国話」などにも触れてい
る。これも「中国語」に対応するのは（漢
語）だけでよい。

もちろん二語以上をあてるメリットも
ある。中国語索引がふえ項目を探しあて

る道がふえることもあるし、中日・日中
辞典的機能を強めることにもなる。ただ
し総頁数は増えざるを得ない。

次に「オリンピック」の中国語表記に
「奥运会」をあてているのは当然である
が、更に「奥林匹克」をその前におくのは
適当ではない。日本語としてのオリン
ピックなる語はオリンピック競技を指し
ているのである。現にこの項の英語表記
は the Olympics とある。従つて中国語表
記は「奥林匹克运动会」またはその略の
「奥运会」でなくてはならない。もちろん
Olympic の略語として「奥林匹克」はあ
るとしたうえで話である。

中国語表記に関連していえば、台湾・
香港関係の固有名詞に繁体字とウエード・
ジャイルズ式発音表記を併記してあるの
は周到である。

四 索引について

立項された語句は全て索引（和文、中
国語、英語）にのるが、しかし項目解説
中の主要な語句のすべてが索引となるわ
けではないのは当然である。必要に応じ

解説中の語句、すなわち立項されない語句を索引に入れるのもまた当然であり、本書では和文索引は推定五五〇〇にのぼる。何としても索引は多いのはいいが、この選択においても編集者の判断が求められるのである。

例を「郭沫若」にとると、解説文中に「佐藤を」とみ〃の名がでてくるが和文索引には入っていない。「郭沫若」の名を知るすべての人がこの名を知るものではないが、反対に佐藤をとみ(B)においては「佐藤富子」として索引に入れている〃の名を知る人はすべて郭沫若の名を知っていると考えてよい。なぜなら彼女は郭と一時期ともに暮らしたという点においてのみ本書の読者にその存在を知られ、該項目中でも触れられているのだから。従って和文索引に入れない本書の扱いは妥当である。問題は全く別のことになるが、ついでに例えば「郭沫若」の解説中「佐藤をとみ〃に触れる意味があるか疑わしい。「周作人」の解説中では「羽太節子」に触れていない。これは解説の執筆者個人の問題なのであるが、また編集者側の問題

とも考えられる。

中国語索引も量的には項目数を上回る。例えば「普通話」うふつは立項するもの本文中では「↓中国語」と導かれる。これは凡例に示されている方式である。しかし中国語索引に「普通話 *Putonghua*」がのっていないのはどうであろうか。「中国語」の解説中には「普通話 *Putonghua*」とわざわざルビつきで(即ち中国語として)扱っているのだからなおさらである。 *Putonghua* から引く場合も大いに考えると考えたい。もう一度、「一 凡例について」で挙げた「A株」に例をとれば、「A株」は「B株」にその解説をすべて譲った。普通は項目に対応する中国語、英語を必ずつけているのであるが、このような集中した場合は別で、「A株」の項は「↓B株」とあるだけで、「B株」の項でも「A株」に対応する中国語、英語はない。したがって中国語索引、英語索引にものっていないのである。むしろ和文索引にはのっているが、「B株」の項は「B股」、*B share* とあるので、これから類推はできるが、項目によってはそうもいかない。集中し

た場合でも中国語索引、英語索引は全項目必要であるように思われる。

五 立項と解説について

小項目事典において立項は人の外見のようなもので、これを見て内身をきめかねないほど大切なことである。

本書は四三〇〇項目、五五〇〇の和文索引によって現代中国の政治、経済から国民の生活、風俗までを紹介している。

ふつうの言語辞典とくらべ、この種の事典における立項は編集意図によりかなり恣意的になり、逆にいえば事典の特徴もここに表される。不特定多数の読者側からすれば編集者の意図にかかわらず、知りたい事柄が事典にのっているかいないかが最も大切な事であり、次にどのよう解説されているか内身が問題となる。本書はこれらの期待によく応えているといえよう。

「愛、忘れられざるもの」。これは張潔の小説「愛、是不能忘記的」の訳である。本項の解説中には邦訳「愛、この忘れがたきもの」として訳書があることを紹介

している。立項のときなぜ「愛、この忘れがたきもの」としなかったのか。「愛、忘れられざるもの」の書名で新たに訳本が出版された（されようとしている）のであれば話は別である。ここは先行したものを使得て立項してよいと考えるが、商標名問題類似のややこしいことになりかねないかどうか。

新聞、テレビで報道される中国関係のニュースヘッドラインの語句を試みに本書で引いてみる。項目にズバリと出るもの、索引を引いて行き当たるもの、関連の項目に触れられているもの、あるいはまるで手掛かりのないものなどなど。

以下いくつかの例をあげるが、無いものねだりに類する事柄であるかも知れぬ。「とき」の解説中に一九九九年一月、日本に到着したとあるが、これより推測するとこの年の一月中までの事柄は本書では記載可能であったと思われる。いっぽう「注音字母」の解説中に台湾では今なお「国音字母」の名で小学校で使われているとある。この今がいつを指すのか不明である。この年の七月、台湾の教育部

は九月新学期より小学校で拼音を使うことを決定したとのニュースが伝えられた。これは時期的には解説中に触れることが無理だったのだろう。「豆腐」の項で「豆腐渣」（工程）に触れることはできなかったか。法輪功は「宗教」、「気功」、「秘密結社」などに関連してだすことも可能であったろうか等々。以上は最終校了の時期に関係することである。

解説についても「コンピュータ」では「千年虫」、「黑客」や、「ビール」には「扎啤」が欲しい。「服装」にはトータルファッション的な内容を増やしたかった。「国歌」の解説中にある聶耳は少なくとも中文索引に出すべきではないか。

立項上のバランスの点で、例えば「上海医科大学」をはじめとして医大はいくつもあるが、北京中医药大学など中医学院に関するものはまったくないのほどか。さらに上海交通大学も立項されていないなど同類項目の取捨選択の基準が気にかかる。また、サーカス、曲芸あるいは雑技の立項も欲しい。

墓石、うなぎ、落花生、かつら、衣料

から蛇頭、酸性雨などにいたるまで、今や中国は我國の国民生活のレベルに溶けこんだ存在となっている。

なんらかの目的で現代中国を知ろうとする人々のための辞典を目指した本書はたしかに看板に偽りなしである。評者は豊橋市に住んでいるが「南通」をみると豊橋市と友好都市関係を結ぶとある。たまたま「鞏固」の項に目がいっただけで見ると誕生日が評者と同じであることを知った。以前は本屋といえばすべて新華書店という名であったが、このことも解説中に数字をあげて証明している。あの頃の実感がなるほどと今になって納得される。

この事典を読むのは実に楽しい。新中国がいつの頃からただの中国になつたのか知らぬが、全ては変化の過程にあり現代中国とても例外ではない。将来いつか本書も中国の変化に対応する措置をとることを余儀なくされよう。しかしそれによって本書の評価に変化が変わることはない。

本書はいま出るべくして出た、これからの現代中国事典の「定番」である。